

# 公益財団法人 日本骨髄バンク 第 92 回 業務執行会議 議事録

開催方法：WEB 会議形式で開催

(本会議を WEB 開催することに関して全理事の同意を得た)

日 時：2023 年（令和 5 年）9 月 8 日（金）17:10～18:30

出 席：小寺 良尚（理事長）、佐藤 敏信（副理事長）、浅野 史郎（業務執行理事）  
加藤 俊一（メディカルディレクター）、鎌田 麗子（理事）、瀬戸 愛花（理事）  
橋本 明子（理事）、日野 雅之（理事）、福田 隆浩（理事）、沓沢 一晃（監事）  
藤井 美千子（監事）

欠 席：岡本 真一郎（副理事長）、石丸 文彦（理事）、鈴木 利治（理事）、高橋 聡（理事）  
三田村 真（理事）

陪 席：猪俣 研次（厚生労働省健康局難病対策課移植医療対策推進室室長補佐）  
横田 友子（厚生労働省健康局難病対策課移植医療対策推進室係長）  
東 史啓（日本赤十字社血液事業本部技術部造血幹細胞事業管理課課長）

事務局：小川 みどり（事務局長兼医療情報部長兼広報渉外部長）、田中 正太郎（総務部長）  
中尾 るか（ドナーコーディネート部長）、関 由夏（移植調整部長）  
戸田 泉（ドナーコーディネート部 T L）、荒井 茂（総務部 T L）、飯出 勝巳（総務部）  
上原 淳（総務部）

(順不同、敬称略)

## 1) 開会

開会にあたり小寺理事長が挨拶した。

## 2) 業務執行会議の成立の可否

業務執行会議運営規則第 6 条により本業務執行会議が成立した。

## 3) 議長選出

業務執行会議運営規則第 5 条により業務執行会議の議長は理事長があたるとされ、小寺理事長が議長に選出された。

## 4) 議事録署名人の選出

議事録を作成するための議事録署名人は、業務執行会議運営規則第 8 条により議長及び出席した構成員が記名押印する。小寺理事長、佐藤副理事長、浅野業務執行理事がこれに当たるとされた。

## 5) 議事録確認

前回（2023 年 7 月 14 日）の業務執行会議議事録を全会一致で了承した。

[議 事]

## 6) 協議事項（敬称略）

## (1) ドナーコーディネートにおけるリモートの有効活用検討ワーキンググループ発足について

中尾ドナーコーディネート部長が資料に基づき説明した。

設置要綱である。移植を希望するすべての患者に、希望する時期に移植が受けられるようにコーディネートを行うことがバンクの役割である。現状は移植率 55%にとどまり、期間短縮も 2021 年以降に期間短縮ワーキンググループで検討した様々な対策を取り入れたことにより部分的には短縮が実現しているが、まだ全体への短縮には結びついていない状況である。ドナーコーディネートへのリモートの導入は、コロナ禍においては移動のリスクや密の回避を目的としていた。そのような目的が必要なくなったとしても、今後は改めてドナーの利便性、コーディネートの効率化の観点からの活用を拡大することが、応諾率の向上や期間短縮にも有効であると考えます。

現状コーディネーターとドナーがどのようにコミュニケーションをとっているか簡単に説明する。適合したドナーは初期判定を経て居住地に合わせた地区事務局に振り分けられて、そこで一人一人に担当コーディネーターが付き調整を開始する。以降ここに示した通り様々な過程を経ながらコーディネートを行っていく訳で、コーディネーターは確認検査や最終同意の面談だけではなく、行程を通して頻回にかける電話や採取施設への同行サポートなどを通してドナーとコミュニケーションをとって行く。その一つ一つでの場面において、例えば確認検査面談は説明が大事な場であるが、最終同意面談は説明も行うが意思確認の場というように、重点ポイントはそれぞれ異なるが、コーディネーターがこれらの全行程でドナーとコミュニケーションをとる目的を大きく言えば、ひとつにはドナーにバンクのコーディネートについてしっかり知ってもらうことである。それが説明にあたる。もうひとつは、ドナーの仕事や体調などの状況や、不安や迷いが無いか等の心情について確認するための情報収集である。その他、ここにあるように採取行程になれば施設に同行して施設での手続きをサポートあるいは診察や検査のサポートも行っている。こうしたコミュニケーションの根幹にあるのは、ドナーと患者の双方の保護である。それ以外にも、コーディネーターはこうした場面を通してドナーとの関係性を作っている。特に信頼関係を結ぶことは重要で、ドナーが必要なことを適切に申告してくれるか。そして決して頻回に起こることではないし起こってはいけないのだが、採取後に何かトラブルがあった時にもバンクへの不信感を抱かずにいてくれるか、そのようなことに影響する部分でもある。

そのようなことを踏まえた上で、コーディネートにおけるリモート活用場面の拡大にあたっては、ドナーや家族の納得性、最終同意後の撤回を防ぐという患者保護、社会の理解、さらに面談施設や採取施設の先生方、HCTC の方々、多くの方々の協力など、さまざまな観点から具体的な検討を行うことが不可欠であることから、ここにメンバーを示した通り理事会、コーディネート関係者、事務局からメンバーを選出し、「ドナーコーディネートにおけるリモートの有効活用ワーキンググループ」を設置したい。ワーキンググループでは先程示した全ての行程でのリモート化も視野に入れた上での検討になって行くかと思っている。

(主な意見)

- <小寺> これはバンクの言わば対外的な顔であるコーディネーターのコーディネートという作業を将来リモート化する。全面的にリモート化するということはないと思うが、全ての行程のリモート化を視野に入れて検討して行く。メンバーを見ても非常にバランスのとれたメンバーだと思っている。いずれにせよバンクの主要な業務である仲介事業に関する事なので、理事の皆様の忌憚のない意見を承りたい。
- <日野> 中尾部長の説明にあったように、コロナ禍で厚生労働科学研究の特別研究事業というのが令和2年に豊嶋先生が研究代表者で行われている。その中でリモートコーディネートの体制を構築するための研究を行っている。iPadを購入して各コーディネーターや各施設に渡して実際にリモートでコーディネートをするという形で確認検査の時は、コーディネーターはリモートで説明して、採血する所にドナーと医師がいるという状況であった。最終同意に関してはドナーとコーディネーターがいる中で調整医師がリモートで入るという状況であった。スマートフォンを使った場合もあるしiPadを使った場合もあるが、iPadを使って84件の協力をいただいた。操作性に関しては大きな問題はなかった。その時にアンケートをとって「もしコロナ禍でなかったとしてもリモートコーディネートを希望するかどうか」というアンケートに答えていただいて、ドナーとしては「リモートコーディネートを希望する」は約57%であった。家族においても約63%が希望するという結果であった。もちろん、理事長が言われたようにすべてのコーディネート過程をリモートにすることではなくて、ドナーや家族が希望された場合に、リモートという手段がとれることによって利便性が向上する。全員が同じ場所に集まるというのはかなり時間的にスケジュールを組むのが難しい。そのようなことでリモートできるようになれば色々なフレキシビリティができると考えている。
- <加藤> 84件における実際のコーディネート短縮効果は数字で出ているのか。
- <日野> コーディネート期間短縮ということでは解析できていない。コロナ禍で人が集まるのをできるだけ少なくしようということで始めたので、最終同意面談であれば4~5人がいる中で、それをできるだけ少なくすることに目的を持っていた。この中ではコーディネート期間短縮の解析はしていない。
- <加藤> やらうと思えばできるのか。
- <日野> データはあるのでできると思う。
- <加藤> トライアル的な意味を持つ非常に重要な先行研究というか実績であるので、それを踏まえて今後の色々なシステムの構築に役立てることができると良いと感じた。コロナ禍という思わぬことの副産物としてリモートが一気に導入され始めている。この機会を逃すことなく進めていかないとまた時間が掛かって、禍を転じて福と為せるかどうか生きてこない。中尾部長が言ったように現場でのきめ細かなドナーや家族との調整を果たしてきたこれまでの役割は非常に重要なことであると私も思う。ただし、時代が変わって行く中でやり方を変えつつそれに対応して行く、進化して行くことは必要である。以前から申し上げているが、コーディネーターの方々のスキルがいかげなものが良く分からない。初期の頃の非常に志の高いボランティアの方々が一生懸命築き上げたものが、10年20年という月日の中でいささか老化が進んでいないか気にしている。去年もお願いしたが、プロフェッショナルなコーディネーターをバンクとして養成して行く、雇用して行く予算建てを厚労省に、来年は間に合わないが再来年に向けてでも予算建てを1番目の項目に上げていく。なかなか

かやってもできないのだと聞いたが、今の機会なら良い意味を持っていただけるのではないかと思う。

<小寺> 加藤メディカルディレクターの意見はほぼ全てを網羅した意見だったと思う。中尾部長が示されたステップごとの図があったが、あそこにコーディネーターが関わってきた。中にはドナーの年齢を始めとする所謂特徴を踏まえれば、人が介在する代わりにリモート化した何らかの方法で、それをスキップする、短縮する、合理化することができるのではないかということは私も思う。それと同時に最初に申し上げたようにコーディネーターというのはバンクの表に向かった顔であるので、そのスキルも非常に高度なものが必要である。数よりもむしろ質の高いコーディネーターを全国に上手に配置する。そのようなコーディネーターを雇用し、仕事をしてもらうためのお金、財政的なサポートが必要である。平たく言えば、安い給料で、片手間仕事でやっていただくような仕事ではもはやないのだと、当局にも理解していただいて、そのようなコーディネーターを育てて行きたい。

<瀬戸> 私はこのワーキンググループを担当させていただいて、現場の意見も入って来ている。コロナ禍においてリモートが若い人たちにも繋がって来ていて、わざわざ出て行くということに対して抵抗が出てくる若い世代を私達は取り込んでいかなければならない。今までバンクが対面で築いてきたコーディネートの質の良さは保ちつつコーディネーターもリモートでいかにそれを築いていけるか、進化して行くということはすごく大事である。いきなり全行程をリモートにする訳ではないので、やれるところからやりつつ、この行程はリモートに向いていないとするのではなく、全体的にここをリモートするというイメージをしていて、できるところからやって行き問題が出てきたら改善して行くということであればコーディネーターの質も上がって行くと思っている。

<小寺> これは非常に大事なワーキンググループである。コロナ禍で奇しくも取り入れ始めたリモート化が本当にコーディネート期間短縮やドナー負担の軽減に繋がれば素晴らしい。

<加藤> 瀬戸理事が言われたように、若い世代にシフトして行くツールとしてはマッチする。若い世代には親と離れて生活している人もいる。その人たちが一同に会するということの難しさをリモート化が解決してくれる可能性がある。84件の中で世代ごとに見たときに若い世代ほどそれを受け入れる傾向があるか。あるいは離れている家族の利便性が浮き彫りになっているのか等これから細かく見ていただきたい。

<日野> 年齢はできると思うが家族関係までデータは取れないかもしれない。できる限り解析して見る。

<福田> 研究班でやってきて色々なコーディネートの多様性を広げて行くのは正に今のタイミングである。ただそれを全て一気に変えていく訳ではなくて、ドナーや家族が希望された場合に、受け入れられるオプションとしてスタートしながら対面の時と同じようにいかなような問題点であるとかを集めて行き、リモート化でのコーディネーターの技術も今後集積していただいて、まずはスタートするのが大事なのではないかと思って聞いていた。私もワーキンググループのメンバーでもあるので、実務的なところで今後一緒に関わって行きたい。

<橋本> ワーキンググループが立ち上がったらまずは何をするのか。今後1年の目標などはあるのだろうか。

- <中尾> 期間短縮という観点で言えば、2021年から取り組んだ取り組みの1つで瀬戸理事にも大きな協力をいただいて適格性判定の運用の見直しをした。それに伴って起きたことの1つとして、初期判定から統一して瀬戸理事たち専門の判定医に見ていただくようになったことで地域差が払拭された。地区によっては確認検査が増加している。1.5倍くらいになっている地区もある。そこで実際に起きているのが、調整医師が足りない、コーディネーターが足りないという問題である。確認検査のリモート化は、今既に起きているそのような問題への対処でもある。日野理事らの研究も参考にしているが、研究の目的が異なるため、今私達がプランとして持っているのとは違う点がある。特に最終同意面談については、ドナー自身がリモート参加という方法は研究班でもなされていないので、そのあたりをどう考えて行くのかとか、最終同意書の取り扱い等々、技術的にリモートが可能であったとしても、そもそも導入が適切なのかも確認しながら、進めるべきことかと思っている。ただ確認検査については問題が発生しているので、HCTC委員会にも協力いただきながら早急に導入したい。また、全行程をリモート化すると採取行程などは逆にドナーの利便性が下がる側面もあり、そのような兼ね合いをどう考えて行くのかとか、これから皆様と一緒に考えて行くべき事項は多い。
- <瀬戸> 全行程で実際にリモートにするに当たって、どのように流れを作っていくかというところの設定をまだできていないので、その見直しから始まって行く。実際にトライアルをして行かないと、いきなり導入できるものでもない。どこの病院で、どのようなドナーに対してやって行くか、ドナーがどのような希望をされるかをアンケート取りながらやって行く。まずは行程のマニュアルを作って、このようにやって行くというのを話し合う場になる。
- <橋本> 瀬戸理事が答えたことが最初に行くことか。
- <瀬戸> 全病院でトライアルをやる訳にもいかないんで、実際に動きやすいところで、どこの病院で、誰を対象にやって行くかなど細かい設定をして行く。
- <橋本> 長期目標と数年間の短期目標があって、まずは瀬戸理事が言うような作業から開始するということか。
- <瀬戸> 全行程をリモートにするには、どこが問題になって来るかという洗い出し、始められるところは始めて行く。長期的なところを言うと、少しでもリモートを選びたいドナーが選べるようにして、選択肢を広げられるようにする。
- <橋本> すごく労力の掛かることだと思う。これから何万人ドナーを募集するとか言っても、何だかんだ言ってドナーは健康な人が短期間だけ医療に係る。色々と分からないで医療に係るというのを調整するのが、バンクだと思う。期待はしつつもどのように進めるのか気になった。
- <中尾> 最終同意については日野理事らの研究成果があったので、その結果を拡大してすでに取り入れている。具体的には、家族のリモートを取り入れて、現在ではさらに拡大してZOOM等を使った画像付きの参加方法を既に実施している。ただドナーもリモートというのは研究班でもしていないので、まずは喫緊の課題がある確認検査のリモート化を視野に入れている。
- <日野> 最終目標を立てないと色々なワーキンググループは動かないので、最終目標は全てをリモート化するにはどうしたら良いかというのがもちろんある。その中で、できることからやって行く。最終的にすべての行程をリモート化できない可能性は

もちろんあるのだが、それが最終目標だと思っていて、それを如何に進めていくかということである。1つ確認したいのは、やはりドナーファーストだと思っている。たしかにドナーが最終同意に来ることは大事であるが、逆に言うとドナーはその時間を失っている。例えば来るのに3時間掛かるとしたら、その3時間を奪ってしまっているので、それを考えたときにやはりリモート化して、ドナーにとっても患者にとっても支障がないのであれば、その方法は追及していくべきだと思っている。ワーキンググループの中で議論する中で最終的にどうなるか分からないが、私自身はそう思っている。

<小寺> すべてを仮にリモート化した場合に移植施設は、すべてのリモート化の基に同意を得たドナーから骨髄・末梢血をいただける考えのもとにDay-7から前処置に入り得るのか。

<日野> 最終同意の後に術前健診があるので、そこでドナーと医師が顔を合わしている訳である。確認検査でも医師がドナーと顔を合わせるの、顔を合わせる機会は医師とドナーではいくつかある。コーディネーターが顔を合わす機会が完全にリモート化すると無くなる可能性がある。対面ありきではなくてリモートであったとしても、きちんとコーディネートできるスキルが得られたとしたら、本当に会う必要があるのかどうかという考え方があると思うし、おそらく将来的には電子署名ができるようになる。紙の署名が要らなくなる時代が来るので、そうすると同意書の問題も解決する可能性がある。色々なことを考えたときに可能性を追求しておくことは大事だと思っている。もちろんすべてを完全にリモート化するのが絶対に良いとは思っていないが、それを検証するワーキンググループではないかと思っている。

<浅野> ワーキンググループが何をやるかというよりも、どうやるかということだと思う。私の好きな言葉というか方法論として「走りながら考える」ということだと思う。トライアルでやってみて、それがうまく行ったかどうかをワーキンググループとして評価する。そしてまた前に進めて行くということである。リモート化も何か結論が出てからワーキンググループで「用意、ドン」ではないと思う。走りながら考えて行くチームだと考えて、キーワードとしてはトライアルということだと思う。トライアルをしつつ慎重に前向きに評価をしながら進んでいく。評価をするのがワーキンググループの大きな役割ではないか。

<小寺> 始めに結論ありきで、それに向かって闇雲に突進するというよりは、トライ&エラーでその都度考えながらやっていただければと思っている。中でも色々意見が異なるところがあると思うが、ドナーコーディネーターにおけるリモート化という言葉自体、人によって捉え方が違うかなという気もする。それをぜひ一致させてやっていただければと思う。このワーキンググループを設置してこのメンバーで、場合によっては必要な人を入れながら、ヒアリングしながら、頑張ってもらいたいということを理事会としてお認めいただけるか。

<一同> 異議なし

## 7) 報告事項 (敬称略)

### (1) 「#つなげプロジェクトオレンジ」キックオフミーティングについて

中尾ドナーコーディネーター部長が資料に基づき説明した。

＃つなげプロジェクトオレンジは様々な外部の方にも入っていただいて実行委員会という形で進めている。私が実行委員長を拝命している。改めて＃つなげプロジェクトオレンジについて簡単に説明する。骨髄バンクの課題である。バンクの現状として様々な課題を抱えている。特に若年ドナー不足、若者の認知度が低い、資金不足、移植率が低い、応諾率が低い、これらのことが課題として私達が認識している部分である。

この課題に対して、今までもバンクは様々な方法で取り組んで来たが、今回の＃つなげプロジェクトオレンジは少し違った視点、若い人にポイントを置くということから、SNSを基本としながらこのプロジェクトを進めたいと思っているところが今までと少し異なる。そのために実行委員会にはメディアの方やSNSの専門家、私達だけではできないことをそのような方々に実行委員に入っていただくことでやって行く。このプロジェクトは9月16日の世界骨髄ドナーデーを契機にスタートする。ここから長く繋いで行くプロジェクトと考えている。

このプロジェクトのコンセプトを説明する。プロの方々と私達が一緒になって話し合う中で、私達が気づいていない所のバンクの良さも整理していただいた。それを簡単に言うと、骨髄移植に関わるすべての人々の間に「見えざるネットワーク」がある。それが、骨髄バンクのカルチャー。すなわち、移植側、ドナー側、一度として顔を合わせるものないままに、それでもしっかりと繋がりながら事業を行うのが骨髄バンクだということである。

例えばドナーになる人は登録者の中でもごく一部の人である。そもそも健康上の理由で登録できない方もいる。そのような方々が骨髄バンク事業、移植を待つ患者のために役に立たないかという決してそのようなことはなく、例えば、ドナーが休むためには、職場の理解が不可欠であるが、それに悩んでいたドナーがいた。悩みに悩んで相談した上司から「わかった。ぜんぶ俺に任せとけ」という言葉もらったことで一歩踏み出せたという事例だとか、ここに例示しているようなドナーや患者双方からのありがとうコメントがこんなにたくさん出て来た。これらをみんなのオレンジボイスとして受け止めて、このようなものも可視化していくことを考えている。

このように今回作り出すのは、企業、団体、インフルエンサー、個人を問わず骨髄バンクの「オレンジのネットワーク」に気軽に繋がって欲しいと示していくアクションになる。患者や骨髄バンクへの寄付や、応援の意思表示という形から関わり、繋がりを感じられ、ドナーに対しても感謝を伝えるチャレンジの認知を高めるキャンペーンにしたい。

これもプロのコピーライターが作ってくれたものである。誰かの役にたちたちという、思いの熱。また元気になりたいという、願いの光。ふたつが出会って、オレンジ色のLIFEになる。今までバンクは色々なところでオレンジ色を使ってきたが、ここで改めてオレンジに意味づけをさせた。プロジェクトについては以上である。

そのプロジェクトの開始についてキックオフイベントをする。9月16日をイベントの日としている。午後3時から6時に実施する。ミッドタウンタワー5階のインターナショナル・デザイン・リエゾンセンターという所を、主旨を理解いただいて無償で貸していただいているリアルイベントである。プロジェクト自体はSNSを中心に行っていくが、そのキックオフはリアルイベントである。

実際に何をするかというと、これまで色々な形で骨髄バンクと関り、支援してくださっている方々に集まっていただき、皆様それぞれの取組みや思いなどを紹介いただきながら、

新しいプロジェクトにどのような形で参加いただけるかを共に考え、繋がりを認識し合う、繋がりを感じ合える機会としたい。内容的にはこのプロジェクトの紹介を始めとして、トークセッションをいくつか考えている。実際にたくさんの企業がバンクに協力してくださっているので、改めて企業の社会貢献とは何かという話だとか、メディアの方にも今までたくさん協力してくださっているので、メディアの方をパネリストにしながらこのような取り組みを広める上で、あるいは社会貢献を広めていく中で、メディアの役割とは何かというトークセッションを用意している。この日に参加できない遠方の方、時間を取れなかった様々なバンクの支援者の方からはビデオで応援メッセージをいただいているので、紹介する。トークセッションの登壇だけでなく、来場者の方々にはたくさんの思いを語っていただくことにしたい。

(主な意見)

<小寺> World Marrow Donor Day に合わせてこのようなものを我が国でもやるのは大変意義深いと思う。今までのものとはかなり変わった進化した企画だと思う。この場所には実際には何人くらい集まるのか。

<中尾> 客席は最大 100 席であるが、今のところ招いている来場者等で 50 名くらいを見込んでいる。

<小寺> これはライブで観られるのか。

<中尾> ライブ中継は考えていない。この様子はプロの方に動画を作成するために撮影もしてもらおう。この取り組みのために特設サイトを同日に開設するので、特設サイトでキックオフイベントの様相を紹介していく。

<小寺> マスメディアの方たちも招いているのか。

<中尾> 登壇という形で招いている方もいるし、取材依頼で声掛けをしている。取材依頼の声掛けは返事が特別にあるわけではないのでどの社が来てくれるか分からないが、テレビ東京の豊島キャスターや、朝日新聞 withnews の編集長の方が登壇で来場してくださることになっている。

<小川> このイベントの他にも 2 箇所ですべて同日にイベントをする。1 つは広島で広島カープ対阪神タイガース戦である。ピースドナーシートと言って、去年、広島の全国大会で高校生が考えたスポーツ観戦をしながらドナー登録をしようというアイデアがあったが、それを春にバレーボールの Vリーグで一度やらせていただいて、今度は広島球場の試合でピースドナーシートということで、20 名の若者を招いてイベントをする。もう一つは東京でラグビー選手がファンを集めてイベントをする。そこでバンクのことも紹介してくださる。この日は同時に 3 つの会場で骨髄バンクのイベントが開催される。もちろん世界骨髄ドナーデーであるので、世界中でイベントが開催される。

#### (4) 調整医師の新規申請・承認の報告

中尾ドナーコーディネーター部長が資料に基づき説明した。

令和 5 年 7 月 1 日から令和 5 年 8 月 31 日に新たに申請・承認された調整医師の人数は 8 名、異動・辞退は 16 名、合計で 1234 名である。



## (5) 寄付金報告

田中総務部長が資料に基づき説明した。

8月に会議がなかったため7月と8月の報告をさせていただく。7月はバンクニュースの発行があり他の月より少し件数も金額も高くなっている。件数は1141件で寄付金額は1104万3571円であった。8月件数は971件で寄付金額は766万2969円であった。令和5年度の合計で件数4351件、寄付金額は7545万5408円となっている。また8月末までに岡三証券グループ100周年記念事業の一環で社会貢献として寄付型クラウドファンディングを実施していて、寄付先の一つとして骨髄バンクを選んでいた。目標金額を200万円に設定して期限日の8月31日ギリギリに最後の追い込みがあって達成した。大変ありがたいことに合計250名程度の方から、約215万円の寄付をいただくことができた。当法人としてはクラウドファンディングを初めてしたが、この経験を今後の寄付集めに活かしていけたら良いと考えている。

(主な意見)

<小寺> いつもながら大変多額の寄付をこの御時世に寄付していただいて感謝している。

## (6) 採取件数報告

田中総務部長が資料に基づき説明した。

2023年7月の件数は国内BM75件、PB31件、国際が1件で合計107件、8月の件数は国内BM50件、PB26件、国際が0件で合計76件となっている。8月までの累計は昨年度を少し上回るペースとなっている。

以上